

## 釈尊

降誕

美しい華は咲き、妙なる鳥は歌ひ、天女たちは、和雅の音楽を奏でる。

浄幢菩薩は、兜卒天上の正法殿の獅子座に上つて、諸の神々たちに説法していられる。

ある日、神々は自然の音楽につれて、菩薩を讃えて歌った。

「菩薩よ

その昔、燃燈仏のみ許にて

仏の記別を得ませし菩薩よ

今こそ行なり智をば開きたまいぬ。

菩薩よ見ませ生死の海を

煩惱の炎は燃えさかり、苦悩はなべてを包む。

菩薩よ見ませ人の世を

人は渴きて、甘露の水をば求むるを

今ぞ、慈悲の雲をよび、法の雨をば降らしませ

悪魔の行や、邪見をくじき

菩薩の道を示してぞ、世の人々を救いませ。」

神々の歌は、菩薩の使命を告げるものである。

おは限りなく、無明と、苦悩に満つる大地は、偉おおいなる光を求める。

今こそ、仏は世に出でたもう。

迦毘羅城の釈迦族の王、浄飯大王は、徳のすぐれた王であり、その妃摩耶夫人は、智徳まどかに備えて、仏の母たるに適しき女性であった。

今や、菩薩は、兜卒天上を下つて、尊き摩耶夫人を聖母として、大地に降誕しようとせられる。

菩薩は今や、懇に最後の説法をなしたもう。

神々は、兜卒正法殿に集つて、菩薩を供養してみ法を聞く。

その時、菩薩の身より光を放ち、遍く三千大千世界の暗をはらう。

虚空より降る花の雨、六種に震ふ天地の相、人々の歓喜、神々の讃嘆。

かくして、菩薩は降つて、聖母の胎にやどる。

母の尊厳、大地の生の神秘、

三千大千世界総がりの、歓喜と、讃嘆は、ただ釈尊一人の上におかれ、摩耶夫人の上へのみそゝがれるのであろうか。

ルンビニーの園の春の装い、樹々は美しい花ににおい、大地はやわらかに草に包まれ、鳥は枝から枝に囀っている。

摩耶夫人は、この美しき園に静養されていた。清き水のたゞえられた他のみぎはを、涼しい風に軽く衣をそよがせつゝ、静かに足を運ばせられる。

一株の無憂樹、美しく花をつけて、枝も重く垂れた無憂樹に歩みを運び、右の手をあげて、一枝を折り給はんとするや、奇なる哉、不思議なる哉、玉の如き王子は、その右脇より御誕生、一指は高く天をさし、一指は低く地をさしつつ七歩を前に進めつつ、

天上天下唯我独尊と叫ばれた。噫。時正に四月八日。

天上天下唯我独尊と生れ、天上天下唯我独尊を自覚し、天上天下唯我独尊を生活し、天上天下唯我独尊を説法し、一切衆生を天上天下唯我独尊たらしめたもう大聖世尊は、今や大地に降誕あらせられたのである。

四月八日。四月八日、仏誕二千五百年の四月八日。歌えよ仏子この尊き日を。

迦毘羅城の上下は、太子の御誕生によつて歓喜につつまれた。

されど人の世の悲しさに、聖母摩耶夫人は、七日にして俄に上天遊ばされた。

太子は悉達多と命名せられる。母なき太子は、摩耶夫人の御妹摩訶闍波提夫人によつて養育せられることになった。

### 煩悶

浄飯大王は、印度の風習によつて、占者を集めて、太子の人相、運命を占わせられる。中にも阿私陀仙人は、香山を下りて太子を見、天を仰いで曰く、

「私は今日まで数知れぬ人相を見ましたが、未だ曾てこの太子の如き、気高く貴き相を拝したることはありません。この王子にして王位に上り、国を治め給わば一天四海を統一をせさせたもう、転輪聖王とおなりあそばされ、もしまた出家修行あそばさるるならば、一切衆生を導きたもう無上覚王となりたもうであろう。我すでに齢百二十歳をすぎ、太子御成長の後、大覚成就遊ばされて、尊きみ法を説きたもうと雖も、聞くことが出来ません。この故に、唯かく悲嘆の涙に暮るるのであります。」と。

王子を得ての喜びも「出家の相あり」との預言によつて曇る。それ以後大王は、群臣に命じて、出家の動機となるが如き、あらゆるものを取り除かれる。

かくて太子七歳にして、文武両道にわたる教育は始められたが、聡明なる天性はすくすくとのびてゆく。

太子十五歳、立太子の式は挙げられた。

されど、太子は長ずるにしたがつてともすれば、王宮の片隅に立つて、眼を閉じて、何ものかを悩み何ものかを疑い、一切を樂しまぬものゝ如くである。

この太子の相を見てとつた大王と群臣とは、太子の心を救うべく一大歓楽郷を實現せんものと立案せられた。いわゆる三時殿の造営がそれである。寒、暑、雨期の三時によつて、暖殿、涼殿、中殿の三殿は出来上つた。天を磨する高樓、天上の美そのまゝの莊嚴華麗、それをめぐる美しい庭園、池の水、聞ゆる歌舞音曲の音色、侍づく美女幾百千、しほむものは花にてもつみとれよ。人生の苦悩思うことなかれ。

三時殿が出来上ると、妃の問題がおこり、摩耶夫人のお里である拘利城の善覚王の長女ヤシヨダラは、中印度第一の美人の誉れが高かつたが、選ばれて、この絶世の佳

人ヤシヨダラ姫は、太子の妃にあげられた。三時殿、美妃、人生の幸福はこゝに集れるものの如くである。

ああ、されど太子の胸中、渦きおこる煩悶苦悩、底なき疑惑は、果して充され、解かせられたであろうか。

生、老、病、死、愛別離苦、怨憎会苦、求不得苦、五陰盛苦、等大地に生きる者は皆、苦悩の運命に翻弄せられて涯しがたい。誰か、この一切衆生の運命を一身に荷負ひ、解脱の大道を求めて大覚を成就し、徹底的なる断案によつて一切衆生を救うものはいないか。

かくて太子は、城外の園林に出遊をこころみて、ある時は東門に老を觀、つぎの時は、南門に病人を知り、三度西門に「死」を見、最後に北門に出家の人に会つた。

「三界は悩みだ。猛き火の如く、浮べる雲の如く、水の月、谷の響、幻、水泡の如し。愚かな者、若きを愛すれど、やがては老と病と死とのために壞れん。」と太子の苦悩は極限へと進んでゆく。

### 出家求道

かゝる間にも王子が誕生せられた。しかしそれも決して太子の心を明るくはしなかつた。王子の名ラゴラとは障ということである。

今や、太子の心を慰め得る何ものもない。底なき暗に求められるものは光、光を求めて、出家求道の志は、何ものを持つてもつなぎとめることは出来ない。潮の如くおしよせる何ものかの力、一時もとゞまることを許さぬ、絶対絶命、太子は今やその声のまにまに一切を棄て、求道の旅に出ようとする。

悩む者よ、悩みぬけ。絶対孤独の灰色の大地に何が力ぞ。

人間の運命に泣く者に、亨樂の巷が何に値する。

汝の外部に汝を救う最後のものはあり得ない。汝、汝を救え。

太子は今や、この悲痛なる人生の運命に目覚め、真実の救いを成就すべき最後の手段を取ろうとせられる。

時も時、幾十の美姬たちの浅間しい寝姿、

夜色沈々、いよいよ出城の時は来た。天に声あり。

「時は今である。一切をすてて、唯、不滅の真理を求めてゆけ！」

いよいよ最後の時である。されど人は使命に出発せんとする時こそ、絶ち難き愛執を知る。

ヤシヨダラ姫の寝室に至りたまえば、何も知らぬ妃は、まどかなる夢にさそはれてスヤスヤと眠りたもう。花の顔、月の眉、無情なる夫と思うことなかれ。我汝を愛せざるに非ず。されど、恩愛にひかれて、生死無明の海にたゞようことは許されない。無上菩提を求めよとの、天の無上命令を如何にすべき。許せ。ヤシヨダラよ！あれど、ゆきつもどりつ、木石ならぬ人の身の……

「今！今！法を求めて、直ちに出でよ！」

衷心の声に、最後の一線を超えて室を出で、御者車匿の部屋にゆき、名馬カランダカを引出させてこれに乗り、チャンナを一人つれて、

「我もし、生老病死、憂悲苦惱を解脱すること能わずば、再び還らじ。」と誓いつつ、二月七日の真夜半、王宮を後に、大願成就のため出発せられる。太子時に二十九歳。

かくて太子は、苦行林に急ぎ、途中、泣き叫ぶ車匿に名馬カランダカを渡し、宝冠をとり、瓔珞をぬぎ、剣をとって与えて王宮に返し、身は貧しき法衣を着して、跋迦林の奥深く、跋迦仙人を尋ねて解決を求め、弥楼山に、阿羅々仙人を、最後に鬱陀羅仙と、常時有名な三仙を訪ねて、その説く所を聞かれた。けれどもその説く所は、ついに太子をして納得せしめることが出来なかつた。

これより勤苦六年、太子の大苦行は始められたのであつた。当時印度には、二つの派があつた。即ち苦行派と、自然外道派とである。一つは、人間の欲望を卑しめ、食を断ち、あるいは減じ、禁欲生活に入つて、肉体を苦しめる人たちである。彼等は、この禁欲苦行によつて、来生の天上界の快樂果報を求めるのである。又、一方は、因果を無視し、享樂を肯定して、本能のままに自然に生きようとした。

太子は今や苦行によつて、何ものかを求めようとせられたのである。しかし、そこにもついに何等の解決はなかつた。太子が求めるのは苦行そのものではなかつた。天上の果報ではなかつた。現実の生死の海を渡つてゆく「道」であつた。眞の解脱であつた。苦行者たちは、唯、愚かなる迷信によつて、単なる長い因襲をそのままに行つていくにすぎなかつた。ましてや、因果無視の自然外道が何で太子を救おう。

苦行六年。苦行無数、ああ、太子を救う何ものもないのだ。絶望と肉体の衰弱と、それだけ残つた人間悉達多はいかなる道を歩もうとするか。

だが、太子は行つまれば、行つまるほど、無視することの出来ない衷心の願をどうすることも出来ない。この衷心の声は、太子をして苦行林を去らしめた。

ああ、法は人を求め、人は法を求める。求める人へのみ、法はささやかれ、精進する人へのみ、道は示される。求道精進なくして、何の人生ぞ。生活ぞ。菩薩も、仏も、法を聞き、道を求める精進不退の一道より生れる。

やがての日の大聖も、かくの如き精進の一道によつて、宿世の大善を發揮し、開發したもう。大覺はまず精進より生れる。

願いのまゝに

難行苦行は、釈尊にとつて無効であつた。釈尊は何の執着もなく苦行を棄てた。苦行に用事があつたのではなく、未来天上界の楽しみに用事があつたのでもなく、あくまで、衷心の満足がほしかつたのであり、道が獲たかつたのであり、悟を求められたのである。

親鸞聖人は比叡山に上つて、二十年の修学につかれ、道を得んとしてついに得られざるを知るや、その時代の大眾によつて是認せられ、崇仰の的となつていた叡山の聖道門を惜しげもなく捨て去つた。聖人にとつて欲しいものは、官位にあらず、學問に非ず、名利にあらず、幸福に非ず、ただ眞實の解脱であつた。道であつた。

古今軌を一にして、真の道の人は、かくの如く、因襲を超え、形骸を捨て、衷心の願いに従つて歩むことに忠実であつた。因襲につけこみ、真実よりも社会的に認められて、誰もあやしまなくなつた制度にとり入つて、名聞や、利養をはかることは容易である。しかし、そこにはもはや真実の道も法も如来も、悟も、歓びも拒まれる。私どもの生活はいつでも、真実に眼をふさいで、形によつて、安らかな生活を求めるか、あるいは真実を求めて、腐つた形骸を超えるかの二つしかない。今や釈尊は、一切を超えて、衷心の願求の如く歩まれた。

### 大決心

太子は静かに苦行林を去り、尼連禪河に下つて、河に沐浴して身を清め、やがて善生村の長の娘難陀の供養する乳靡を受けて、体を養われた。これを見て、出家この方、太子にしたがつて苦行をつづけていた、憍陳如等五人の者たちは、太子はすでに墮落したとて、逃げてしまった。太子はそのあとを追わなかつた。願のためには、時に百千の人を失うもまた止むを得ない。

たつた一人、尼連禪河の畔、菩提樹が鬱蒼と茂るところ、大盤石を座となし、吉祥草を敷いてその上に端座せられ、「虚空より刀杖、我が身に雨降り、寸々節々、体を割くとも我もし生死の海を度らざれば、この菩提樹下をついに移らず。」との大決心を持つて、その大覚を成就しようとせられる。

ああ、汝の一生、かくの如き必死の覚悟で人生をつかみ、道を得、法を知らうとしたことがあるか。

### 降魔

太子が菩提樹下に結伽趺座して道を成就しようとせられるや、内外の悪魔は、来つてその成道を妨げようとする。太子は今や悪魔と最後の戦いをなしたもうのである。この太子の戦いは、菩提樹下においてはじめて開始せられたのではない。それはすでに王宮にいられた時から、一日として太子を悩まさない時はなかつたのである。

天の大魔王は、その眷族をつかわして、必死の妨げをする。美しい三人の美女、快楽、不快、名利等々をもつて誘惑すれども、太子の心を動すべくもないと見るや、一天俄かにかき雲り、雷鳴電光天地にとゞろき、悪鬼夜叉は牙をかみ、毒火をふき、刀劍の雨、岩石の霰、ものすごくも荒れに荒れる。

されど、金剛不壊の道心の前に悪魔何するものぞ、今や戦いに敗けた悪魔は、その正体をあらはした。

太子は叫んだ。そして勝つた。

「汝の

第一軍は楽欲

第二軍は不快

第三軍は飢渴

第四軍は渴愛

第六軍は怖畏

第七軍は疑い

第八軍は虚栄と剛情

第九軍は名利

第十軍は自らを讃め他を毀ることなり。

これは汝の軍、汝の武器なり、勇者は勝ちて折伏し、安らけきを得たり。」  
 ああ、悪魔とは何か。悪魔は外よりも攻めよせる。しかし心内におこる煩惱こそ、最も恐るべき悪魔であつた。

騒々しい凡夫の胸中には、彼等はその正体を見せない。見せずして、汝になりきつて、汝を苦しめ、無明海に流転せしめる。されど今や釈尊の自証に輝く智慧光は、彼等の正体を曝露した。こころみに見よ。悪魔の十軍は、悉くこれ、我等が持っているものではないか。

第一軍は楽欲、人生の帰結は楽しみにあり、享樂にあるとする煩惱のために、道を失い、身を亡ぼし、第二軍不快、暗い心、不愉快な心に動かされて自他を傷つけ、道を歩まんとするや、様々な不快を与えられるが故に退転し、第三軍、飢渴、念仏一道、正法を生きてゆけば、あるいは飢えはしないかと心細く思い、第四軍、渴愛即ち愛欲に溺れて苦しみ、第五軍、懶惰、精進不退の生活をなまけによつて失い、第六軍、怖畏、非難におそれ、迫害におそれ、権力をおそれ、死をおそれる等々によつて、安心なく、第七軍、疑いこそ我等を迷路につれこみ、一切の価値を失わしめ、生死輪転の痛ましき凡夫たらしめる悪魔、第八軍、虚栄と剛情、内面の貧弱をつつんで、人に威張り自ら培つちかおうとせずして、世に虚栄をはる者は、必ず剛情我慢の強い人である。剛情なるものは強きに似て、真の力の前には極めて弱い。第九軍名利、名聞利養のために道を失い、第十軍、自讃他毀、他をおとしいれ自らを讃めて、自らを高めようとする悪魔。

以上を一一探ぬれば、一として我等の心中に欠けたるものはない。しかも常にこの十軍のために敗けているのである。けれども、彼等は至つて強いように見えて、光の前には極めて弱い。今や、釈尊は一切の悪魔を降伏しおわつて、正覺を成就せられるのである。

## 成道

時あたかも十二月七日の夜半、初更、天地寂として声なく、寒月高く冲天にかゝつて、空には一点の雲さえ見えない。太子はついに悪魔に勝ちて、心いよいよ清浄に、欲を離れ、悪を超え、深い禅定に入つて、天地の平等実相を覺り、苦樂悲喜の一切を亡ぼして、ついに一切の繫縛を解脱して遠き過去を憶い、宿世を觀じ、一切の無明を滅し、闇を晴らしたもうことが出来た。

第二更に至つて、神通の眼は開かれ、十方衆生、果てしなく生死海に流転する痛ましき相をつきとめたまい、十方世界は我が有なり、一切衆生は我が子なりと叫びたまひ、大悲の熱涙は十方衆生の上にそゝがれた。

さらに第三更に至れば、人生は苦なりと感じ、苦の困をつきとめて、煩惱であると断じ、煩惱を滅して涅槃に至る、その道を明かに知り、一切衆生が無始以来生死流転

するは、無明にはじまつて老死に至る十二因縁の道理によることを悟り、根本の無明を智慧によつて滅し、ついに心清浄に、身安らかに、久遠の法身を得証して、釈迦牟尼世尊となりたもうたのであつた。

時あたかも十二月八日、あけの明星輝く四更、畢生の大願は満足して、無上覚を開きたまい、生死を度つて涅槃を得、ついに人類の救主として立られたのであつた。時に三十五歳。

光悦

それより八十歳、御入滅まで、一切衆生救済のために、法輪を転じたもうこと八万四千、その大慈悲はいかなるものをも漏さなかつた。誠に如来の前には、一切衆生は平等であつた。いかなる身分の卑しいものも、愚者も、悪人も、すべて覚を開けば、平等に仏になる身と尊重せられた。

ああ、釈尊によつて高くく掲げられたる涅槃の燈炬、無私の生活、無上正真の大道こそは、人類の永遠に歩むべき道であり、燈台であり、生命であつた。

私どもは今、南無阿彌陀仏のみ名において、世尊と同心一如の血潮を信の中に獲得して、教主と仰ぐ身の幸を憶うものである。仏誕二千五百年を迎え、いよく仏の教えを大地に輝きあらしめんと念願すると共に、三国の高僧に合掌して、その恩徳を謝し、東洋の幽玄なる文化の中に生れたることを歡ばざるを得ないものである。